
紅イ月

琅來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅い月

【著者名】

琅來

N5899P

【あらすじ】

百合とひう名の姉と、百合とひう名の妹。この二人と、紅い満月
が揃う時に起こる悲劇とは。

第一章「～平成ノ世、新暦ノ神無月～」（前書き）

このシリーズは、全体を通して流血表現が出て来ます。苦手な方は、どうかご遠慮下さい。

また、時代考証などは一切行っておりませんので、ご了承下さい。

これは、あくまでもフィクションです。

第一章「～平成ノ世、新暦ノ神無月～」

百合^{ゆり}と云う花の名前を持つ少女は、とても焦つて自転車をここでいた。

今の時刻は、もう六時を過ぎ掛けている。

（ああ、急がなきや！ もうこんなに真っ暗だし！ つっここの前までは、この時間になつても明るかつたのに～！）

だから、つい友達の家に長居してしまったのだ。

百合は、ついこの間九歳になつたばかりの、まだ幼い少女である。百合はその暗さに、僅かながらではあるが恐怖心を抱いていた。（あ～あ……こんなに暗くなるんだつたら、もつと早く出るんだつた……）

そう思つても、既に後の祭りである。

（ま、あんまり出たくなかったって言つのが、本音なんだけど。だって今、うちにはパパもママもないし……）

だから、百合は家に帰つても、たつた一人きりなのである。

それが寂しくて、結局ズルズルと長居してしまつたのだ。

しかし、何故父も母も家にいないのか？

（うん……だって、パパもママも今、病院にいるしなあ……それに、まだ一度も会つたことないけど……あたしの妹の……百合^{ゆり}も）

彼女の母は、数日前から出産の為に病院に泊り込んでいる。

そうして、今日の夜中……午前一時頃、ようやく妹が産まれたのだ。

『百合』と名付けられた、九歳年下の妹が。

どうして自分が百合なのに妹が百合なのか、百合には全く分からぬい。

『百合』という漢字を見なければ、共通点など何もないのだ。

これが姉妹だとは、ちょっと思えない。

そして本当ならば、百合もこの日、病院に行くはずだった。

(ママの『サンゴノヒダチ』が悪いからあんまり負担掛けちゃいけないって、あたしも連れてつてくれなかつたんだよなあ。『サンゴノヒダチ』って、何だろ？ てか、そんなことよりも、あたしもママと妹に会いたかったなあ……パパの馬鹿)

軽く空を見上げると、いくつかの星が見える。

綺麗に晴れた空だった。

視線を田の前に戻すと、ふと、自分の通う小学校が目に入った。それを見た途端、思わず百合の顔に笑みが浮いた。百合の家はその近くなので、この暗闇の中で小学校を見ると安心した。

百合が、視線をふと小学校の上に巡らせた、その時だった。妙な物が、百合の目に飛び込んだ。

どうして今まで気付かなかつたのかと、訝しむ物でもあった。

それは、校舎にその下の一部が隠れる程低い位置にある、紅い…

…紅い、満月だった。

それを見た途端、百合の腕にゾッと鳥肌が立つた。

百合は思わず自転車を止め、しげしげとその満月を見詰めた。

僅かの好奇心と、恐怖を併せ持つて。

その月は、驚く程に紅かつた。

まるで、流されたばかりの、血のようだ。

百合は、鳥肌の立つた腕をさすると、再び自転車をこじ始めた。先程とは違い、泣きそうな顔になつて、百合は角を曲がつた。そして少し勢いを付けて坂道を下つていると、いきなり自転車のライトの範囲内にある物が飛び込んで来て、百合は驚いてブレーキを掛け そして、勢いを殺し切れずに、横倒しなつてしまつた。顔を上げると、暗闇に融けて消えてしまいそうな程に真っ黒な黒猫が、金色に爛々と光る目でこちらを見返していた。

百合は、ほつと安堵して軽く息を付いた。

「良かつたあ……轢かれなくて良かつたねえ？ 猫ちゃん？」

百合は笑い、黒猫に向かつて手を伸ばした。

だが、触られることを嫌つてか、黒猫はその手を掻い潜ると、闇に溶け込んで行つてしまつた。

「あ～あ……ちょっと、残念だなあ……」

百合が、倒れたままの身体を起こそうとしたその時　　いきなり、辺りが明るくなつた。

見ると、曲がつて来た車が背後から近付き、視界一杯に広がる。倒れ込んでいたせいで、車は自分のことが見えなかつたのか……。大きなクラクションを鳴らし、耳が痛い程のブレーキの音を響かせ、車が近付いてくる。

百合は慌てて立ち上がつたが、足首を捻つてしまつたのか、足が痛くて歩けずに、再びへたり込みそうになつた。

それ以上に、あまりの恐怖に身体が動かない。

百合は近付く車を、ただただ見詰めることしかできなかつた。

車のヘッドライトが、痛い程目に沁みる。

（あ……これ、多分うちの車だ……じゃあ、きっとパパが運転してるんだよね、これ……）

全ては、一瞬の出来事だつた。

鈍い痛みと共に、百合は跳ね飛ばされた。

そして、道路の上に倒れ込んだ。

生暖かい　空の、紅い満月のように紅い血が流れているのが、はつきりと分かる。

車から飛び出て来る人の姿が、ぼんやりと見えた。

（あ……やつぱり、パパだ……）

秋斗は、真っ蒼になつて車から飛び降りた。

妻の調子が良くなつたので、早く家に帰れそうだと急いでいたら、その、まさに急いでいた理由である娘を……百合を、自分が轢いてしまつたのだ。

秋斗が急いで百合の傍に近寄り、その小さな身体を抱え上げると、

百合は父の姿を認めたのか、弱々しく微笑んだ。

そして、一体何を感じたのか 恐らく、驚きによるものに大きく目を瞠ると、九歳の子供には似合わない、自嘲するような笑みを浮かべ……そして、瞳を閉じ、静かに事切れた。

「百合……百合つ？ おい……しつかりしろ……しつかりしろつ！ おい、百合つ！」

秋斗の悲しげな悲鳴が、辺りに響き渡った。

百合の目が開くことは、一度となかった。

空からは、皓々と輝く紅い満月が、一人を見下ろしていた。

第一章「～平成ノ世、新暦ノ神無月～」（後書き）

神無月…十月の異称。

第一章 「～江戸ノ世、旧暦ノ歸走～」

「「めんね、百合、百合。^{ゆり}こんなもんしか食べさせてやれなくて…」

「だいじょうぶだよ、かあさん。だって、とりもおさかなもたべちゃいけないんでしょ？ それに、ももがつまれたときからずっとこううだつたし、ももはきにしてないよ？」

五歳の百合は首を傾げて言い、十一歳の百合は、小さく頷いた。

今の世は、江戸時代、元禄十四年。

後世にも悪名高い、徳川綱吉の制定した『生類憐みの令』と呼ばれる一連の法のうち、最初に出台了れた法から数えて、既に十四年が経っていた。

一人とも、産まれてこの方、肉などという物は口にしたことがない。

もし肉を食べたことがばれようものなら、たちまち捕まってしまうのだ。

百合は、椀の中に残つてこむともじい雑炊を見て、小さく溜息を付いた。

自分達が産まれる前からずっと続いている法なのに、今、母がそう言つるのは、理由が決まつていた。

一日前に、父がお犬様を殺したとして、捕まつてしまつたからだ。だが、その本当の理由は、野犬に襲われた幼子を、犬に石を投げ付けて助けたということなのだ。

この法がなければ仕方のないことだと付けられるだらうが、現実は違う。

（父さんは、何にも悪いことしないのに。むしろ、いこいとしたのこ……）

百合などはそう思うのだが、現実は厳しい。

そして、そのせいで働き手を奪われてしまつた百合達一家は、母

の内職で何とか保つてゐる状態で、食い繋ぐのすらやつとだ。

しかし人の噂によると、六年前の大飢饉の頃から犬小屋という物が作られ、そこで犬は人にも勝る素晴らしい食生活を送つてゐるらしい。

怒るよりも何よりも、あまりのことに呆れ果てる他ない。

（将軍様、人よりも犬が大事みたいだし……だから父さんは……）

百合は思わず悲しくなり、小さく首を振つた。

（考へても仕方ないよ。……だつて、罰金払えつて言われてもうちはそんな大金ないし、だから、多分牢屋に……）

「それじゃあ頼んだよ、百合、百々。もうこんなに暗いんだから、二人だけでお使いに出すのは心配なんだけどねえ……」

「何言つてんの？ 母さん。あたし、もう十一だよ？ もう日は暮れ掛かつてるけど、二人でお使いぐらいできるから。それに、これ届けるだけでお駄賃が貰えるんだから、悪い話じやないし」

父が野犬を殺したとして捕まつたのは、既に隣近所へ知られていて、まだ幼い二人の娘を不憫に思つたのだろうか、ちょっととした仕事やお使いを、僅かではあるが駄賃を払つて頼む人が増えていた。今回のもその口で、少し離れた所に住んでいる娘夫婦に届け物をしてくれと、同じ長屋に住んでいる老婆が頼んで来たのだ。

百合としては、荷物を運ぶだけで少しでもお金が貰えるので、喜んでやろうと思つてゐる。

そして百々も一緒に、その分お駄賃を弾んで貰えるのだ。

だから百合は、今日も百々を連れてお使いに行こうとしていた。

「じゃあ、気を付けてねえ、二人とも」

「はいはい。分かつてるつて」

「だいじょうぶだよ、かあさん。ねえさんはすつじくつよいんだから！ ちや～んとももをまもつてくれるんだから！ ねえ、ねえさん？」

「うん、田々。田々は、あたしがちやーんと譲つてあげるからね?」

「うん! あのねかあさん、このまえ、ももがすずちゃんといつしよにあそんでたら、へんなひとがきて、へんなことさせこてきたけど、ねえさんがあっぱらってくれたんだよ?」

「はいはい。田々、それはもう二回田よ?」

母が諭すと、田々は大きく田を蹬つた。

「え~? そうだけ?」

「いいから、もう行くよ? 田々。このままじやあ、帰つて来る頃にはもうタジ飯の時間過ぎちゃう」

「え! それやだつ! ジヤあ、こいこい!」

田々は駆け出して行つてしまご、田舎は慌ててそれを追い掛けた。

「おはつはふえ、ふええあん。ふおんふあうこほるあえへ」「田々、口一杯物入れながら喋らないの。何言つてるか分かんないよ?」

「んつ

田々は、口クソと口の中に入つていた物を飲み込むと、笑つて言つた。

「ももね、『よかつたね、ねえさん。』こんなにも『らえて』つていつたの。だつて、にこもおにぎりくれたんだよ? それに、かあさんにつてもうこいつこも!」

田々のはしゃいだ声に、百合も笑つて言つた。

「うん。あたしも凄く嬉しけわ。母さんも、これでちよつとは助かるね」

「うん!」

「くら姉とはいえ、田舎もまだ十一歳の、育ち盛つ、食べ盛りの少女である。

食べる物が少ないといつのは、百合以上に辛いことだった。

「あ、ねえさん! みて、おつきあまつ!」

百々のはしゃいだ声にかられて空を見上げると、紅い色をした満月が光り輝いていた。

「うわあ～……きれ～……。すつじーい、すてきだねえ……」

百々の言葉に、百合は眉をひそめた。

「そう？ あたしには不気味で不吉な匂にしか見えないけど……」

百合は眉をひそめた。

事実、百合の腕には、寒さのせいだけではない鳥肌が立っていた。しかし、その言葉に百合が猛反発した。

「ちがう！『つき』じゃなくて、『おつきさま』っ！ それに、せんせんぶきみでもふきつでもないもんっ！ ねえさん！」

「はいはい。もう行くわよ？ 止まつてないで、さつさと歩いて」

「うん。わかった。あともうちょっとどうかにつくんだよね？」

「うん、そうね。でも、走って転んだら……あつ、ちょっと、百合

！」

いきなり、百々は百合の手を引つ張つて走り出した。

「ほり、ねえさん！ あともうちょっとだから！ いそじー！ ね

？」

百合と百々の身長差は、一尺（約三十センチ）程もある。

だから、しきりに手を引つ張る百々に合わせていると、自然と百合の姿勢は低くなり、前屈みで走ることになってしまった。

そして、そんな無理な姿勢がいつまでも続く訳がない。

走り出していくらも経たないうちに、百合は大きく体勢を乱し、転び掛けてしまった。

驚いた百々が、思わず手を放したせいで転ばずに済んだが、そのままに、大事に抱えていたお握りが転がり落ちてしまった。

「あつ！」

百合は思わずそれを拾いに行こうとしたが、不意に足元の泥に足を捕られ、転んでしまった。

昨日に降った雪が、融け掛けていたのだろう。

「だいじょうぶつ？ ねえさんっ！」

「だ……大丈夫よ。ちょっと、転んじゃつただけだから……」

「よかっただよー。ね、じゅあやか、おしゃべりがてらねー。」

駆け出して行ってしまった。

「氣を付けて、直々、あたしに話して、転はないで……」

百合の詠葉に、途中で迷せ林でじまつ

だが、しつかりとお握りは掴んでこっちに駆け戻つて来る。

ねえさー。もひてきただよひへ。

「うん。ありがと、百々。でも、帰つたりゆさんこ怒りわせちやうね」

「どうして？ もももねえさんも、ちやんとおつかいしたんだよ

「あのね、お使一ながやをどつたナビ(アビ)ひなつて帰つて来た
?」

「...」

百々は歯を尖らせて言つて、立ち上がつた百合にお握りを渡した。

「ねえさん、これ、ちや～んとひりんでありたから、なかはよいれ
いがーだ?

「うん。そうね」

百合が百々の頭を撫で、歩き出そうとした、丁度、その時だつた。ガルルルルウ、という獣の唸り声が聞こえ、百合ははつとした。

背後を見ると、爛々と光る目がいくつもある。

そしてその背後には、大きくて丸い、紅い月が見える。

まるで、犬ではなくて狼が、紅い満月を従えているかのようだ。

「ねえおと……」

「百々逃げるわよ」

「でも、あれってこなれただよ……へ」ハリハリパンの

?

百々は、泣きそつな顔で百合を見上げた。

「由れんに申し訳ないナゾ、これを使つわ。そつすれば、時間が稼

げる

百合はそう言つと、お握りを野犬の群れに向かつて投げ付けた。さすがは犬と言つべきか、投げられてまだ空中にあるうちに、野犬達はお握りに向かつて飛びかかった。

だが、百合はそれを見ていなかつた。

投げ付けると同時に百々の手を引いて走り出したのだ。

百合は背後を振り返らずに、必死に走つた。

(長屋まで……せめて長屋まで行けば、あいつらもきっと諦めてくれるはず……だから、それまでっ！)

しかし、五歳の妹を連れてだから、勢い良くなは走れない。いくらもしないうちに、犬達が追つて来る気配がした。あまりの恐怖に怯えてしまつたのか、百々の足が止まり掛け、そのせいで大きく足元を乱してしまい、百々は転んでしまつた。

「……！ 百々っ！」

百合が慌てて助け起こすと、もうすぐに、犬が迫つていた。

「百々。……百々は、逃げなさい」

百合は、静かな声で言つた。

「……でも、ねえさんは……？」

百々の泣きそうな顔に向かつて、百合は小さく笑つた。

「大丈夫。あたしが犬を追つ払つから百々は逃げて。それで、母さんとか大人呼んで。そうすればあいつも諦めるだろうから。あたしが助かるかどうかは百々に懸かつてゐんだからね？ 一生懸命走つて逃げて」

「うん……うん、わかつた……」

百々は、泣きじやくりながらそう言い、一田散に走り出した。

それを微かに笑いながら見送ると、百合は足元を探つた。

(石があれば、ちょっとは足止めができるわ。何かないかしら……?)

ふと、百合の視界にある物が入つた。

(これ……木の棒だわ。お誂え向きじやないの)

百合はその棒を手に取ると、構えた。

刀の持ち方などは全く知らないが、だいたいこんなもんだろうと見当を付け、しっかりと握り締める。

すると　ふと、百合の脳裏に痛みが走った。

それと同時に軽い目眩がし、足元が僅かにふらつく。

その隙を逃さずに、野犬達は百合に向かつて飛びかかつて來た。百合は必死で棒を振り回し、野犬達を殴り付けた。

そのうちに、どんどん目眩は酷くなり、吐き気までしてきた。そして……『ある物』が、百合の脳裏に蘇った。

だが、それを詳しく吟味している暇はなかつた。

百合は必死に野犬達を棒で殴り付けていたが、ついにその時が來た。

一匹の野犬が棒を掻い潜り、腕に噛み付いた。

それを皮切りに、野犬達が百合の振るう棒をくぐり抜け、身体中に噛み付いた。

百合は、紅い血を流しながら、その場にゆっくりと倒れた。
(もう、あたしにできることは、何もない……)

百合はそつと視線を巡らせて、百々の姿を捜した。

だが、どこにもその姿はない。

(良か、つた……逃げ切れたんだ……百々……。良かつたあ……)

そのことに安堵した途端、百合の脳裏に蘇つた『ある物』を吟味する余裕が、生まれた。

……生まれて、しまった。

それを吟味した途端、百合の顔にはただただ驚愕のみが浮かんだ。そして、その百合の喉元に野犬が噛み付き　信じられないという表情を最期の表情として、百合は事切れた。

その死体を、野犬達が喰い荒らす。

近くに住んでいる者達も、関わり合いたくないので、放つて置く。その百合の死体と、それを貪る野犬達を、紅い満月は、ただただ、冷たい光を放つて、静かに見下ろしていた。

第一章「～江戸ノ世、旧暦ノ師走～」（後書き）

師走：十一月の異称。ここでは陰暦であるから、現在の一月頃に相当する。

第三章「～平安ノ世、旧暦ノ水無月～」

「この頃はあまり雨が降っていないが、夏といづれともあり、ねつとりとした暑さになつてゐる。

百合は、東北の対にある白室で、あまりの暑さにへたり込んだ。

その百合の隣には、腹心の女房である淡雪あわゆきが控えている。

「……姫様。大丈夫でございますか？」

「これが大丈夫に見えたら、お前の用は節穴だわ」

百合はそっぽを向いて言つた。

十五歳の少女にしては、その動作はどこか子供っぽい。

「では……やはり、あのことを気に病んでおられるので……？」

淡雪の言葉に、百合はバン、と床を叩いた。

「……気付いているのなら、言わないで頂戴つ！」

百合の怒りに満ちた顔と声に、淡雪は俯いた。

百合はそれに気まずくなり、更にそっぽを向く。

『「あのこと」とは、十五歳になつたばかりの百合ことつて、まだ考えたくないこと』『結婚』のことである。

この平安の世では十一、二歳で結婚することも行われてはいるが、百合にはまだ考えられないことだった。
しかもその相手さがみのくにというのが、ぎりぎり貴族と数えられる従五位下じゅうごい位下の相模國さがみのくにの國守くにのかみである受領すりょうの息子で、おまけに持つてゐる位階は従八位上じゅうはいじょうである。

しかも、歳は既に二十四になつてゐるのだ。

受領は金持ちだから、政略結婚の相手として薦められてゐるのだろうが、仮にも自分は、藤原の血を引く従三位の中納言ちゅうなげんを父に持つ身だ。

しかも、自分は長女なので、自分と結婚する相手が、将来この家を継ぐのである。

金田當てに、いぐら上國の受領とはいえ、従八位上の受領の息子などと結婚したくはなかった。

受領よりも金がなくても、もつ一十四になつていても、せめて正六位が従五位ぐらいの位を持つてゐる相手にして欲しかつた。それに、まだ従八位上では、藤原の流れを汲むこの中納言家の次期当主として、相応しいとは決して言えない。

「暑いわ、淡雪。釣り殿まで行くから、付いて来て頂戴」

「はい、姫様」

百合はそう言つて檜扇を持つと、部屋を出て行つてしまつた。

「やはりここには涼しいわ。そつは思わないこと? 淡雪」

「はい。大変涼しゅうござりますね、姫様」

百合は田の前にある大きな池を眺め、頬を撫でる風に田を細めた。ささくれ立つてゐた気分が、落ち着くのが感じられる。その時だつた。

「あら? こんな所に先客がいるとは思いもしませんでしたわ。そつは思わないこと? 志摩、能登、六条」

「そつでござりますね、姫様」

「仰る通りにござります」

「全く、図々しいにも程がありますねえ」

百合は、顔を硬く強張らせて背後を振り返つた。

そこには百合の想像通りの者が、三人の女房を引き連れて立つていた。

「いぢらも、お前がここに来るとは思いもしませんでしたわ。三の君」

「あら? 奇遇なことにそちらですか? 百合お異母姉様?」

その言葉には、刺々しい響きがたつぶりと含まれていた。

「お前に『お異母姉様』と呼ばれる筋合ひはないわ! 百々つ!」

百合は田を怒らせ、床をバンと叩くと鋭い目線で百々を射抜いた。

それを受け、百合々は憎らじここまでに落ち着き拵つた態度で、ぱちりと檜扇を閉じた。

「そうですか。それでは、大君おおきみと呼ばせて頂きましょう」

その目線と言葉は明らかに毒々しく、百合は更に眼差しをきついた。

百合には、妹が二人いる。

一人は柚麻瀬ゆまぜといふ名の、中の君なかきみと呼ばれる一つ下の同腹の妹で、もう一人が、今日の前にいる三の君さんのかみ 柚麻瀬と同い年の、異腹の妹だ。

「大君。どうして貴女もここにいるのか、伺つても宜しいかしら?」

「あら。涼みに来る以外に何か目的がありまして?」

百合はつんと澄まして言つた。

「まあ? ここは、『貴女の物ではない』のこ?

それには意地の悪い棘が含まれ、百合は反応せずにいられなかつた。
「何ですつて?」
百合がきつつく睨むと、百合は嘲るように笑い、胸を反らして言つた。

「あら、だつてそうでしょう? この家は元々、わたくしのお祖父様が持つていらした家よ。それをお母様にお譲りになられて、そこにお父様が貴女達二人を連れて来ただけじゃないの。それに、二親のどちらもが宮筋みやすじの血を引いているわたくしのお母様と、精々出世しても従五位下にしかなれなかつた父を持つ貴女の母では、比べるべくもないと思わなくつて? 貴女が大君であつたとしても、ここは貴女の物じやなくて、わたくしの物よ」

その言葉に、百合はカツとなつて立ち上がつた。

「私だけでなく、お母様まで侮辱するなんて! 断じて赦せる」とではないわ!」

その言葉に、百合はせせら笑つた。

「大君。貴女に、わたくしを赦す資格も赦さない資格もないわ」

「今に見てなさい！ 今はそう言つていられるだらうけど、私が家を継いだらそんな口なんて叩けなくなるわ！ そうなつたらお前もお終いね！」

勝つた、と、百合は思った。

いくら田々が叫ぼうと、喚こつと、自分がこの家の大君であるといつ事実に変わりはなく、また大抵の場合は長女とその夫が財産を継ぐ為、この家を継ぐのは自分である。

そこを衝けば、この狡猾な異母妹でも、手出しができない……はずだ。

しかし、百合はその言葉に、何の衝撃も、動搖も見せなかつた。

「それこそ、そう思つていられるのは今のうちですわ、大君」

百合の言葉に、百合は眉を寄せた。

「何を言つているの？ 私は大君で、貴女は三の君。もし私に何かあつたとしても、家を継ぐのは柚麻瀬よ。お前じやないわ」

その言葉に、百合はいきなり笑い転げ出した。

百合はそれに眉根を寄せて、淡雪を呼んだ。

「行くわよ、淡雪。三の君がいるのでは、ここは釣り殿ですらないわ。ここが釣り殿でないのならば、ここで涼む意味はないもの」

百合はそう言つと、立ち去つとした。

だが、百合はそれを許さなかつた。

百合が、笑い過ぎて田尻に浮いた涙を拭つて、嘲るようになつたのだ。

「あら、もう一十四になるといつのに従八位上の位しか持たない、その親も従五位下の受領なんかの、金はあっても身分の低い貴族ではない男と結婚した女が、いくら大君でも家を継げる訳がないでしょ？」

その言葉に、百合の顔から血の気が退いた。

「お……まあ……どう、して……それを……」

「まあ、まだお話の段階らしいんですけど、確定事項としても可笑しくはないぞうですわね。どんなに頑張つて出世しても従五位下にし

かなれなかつた男の孫としては、大変相応しいお話ですわ

その言葉に、淡雪が食つて掛かつた。

「三の君様、その仰りよつ、断じて聞き捨てなりません！ あたくしのことは何と言われよつと構いません。ですから、その言葉は取り消し願います！ 大君である姫様に失礼ではありますか？」

淡雪の決死の言葉を、百々は鼻息一つで飛ばしてみせた。

「そんな物、必要ないわ。だつて、この家を継ぐのはわたくしですもの」

その言葉に、百合は思わずへたり込みそうになつた。

「何で……すつて？」

「当たり前でしょう？ だつて、わたくしのお母様の親族は皆、宮筋の血を引いているんですもの。わたくしが家を継がなかつたら、その方に失礼ですわ。お父様から直に伺つたのですが、大君と中の君は受領などの金持ちに嫁がせて、いざと語り時の為にして、そしてわたくしは……」

百々は、勝ち誇つたような笑みを浮かべた。

「今の式部卿宮様は正四位下しきぶきよのみやほで、御歳二十三じよさいにじさんの若い方ではいらっしゃるけれど、幼かつた頃からとても博識なお方でいらっしゃって、おおかみ主上から助言を求められることもしばしあることとか。そして、そのお方とわたくしが婚儀を執り行い、この藤原の家を継ぐのよ。お父様から直接聞いたことですもの。間違いはないわ」

その言葉に、百合は言い返すことができなかつた。

ただ、呆然と百々のことを見詰めていた。

百合は、寝返りを打ちながら悶々と考えていた。

（どうして？ 私だつて、お父様の子歴とした中納言の大君なのに！ なのに、わたくしと柚麻瀬は厄介払いみたいに！ いくら三の君 百々の祖父母が宮筋だからって……どうして、三の君には正四位下の位を持つている式部卿宮で、わたくしには従八位上の

兵衛府の大志なの？あまりにも落差が激し過ぎて、嫌になるわ。
階位にして十七階位も違つし、向こうは昇殿の資格もある、立派な
親王で……）

百合は、思わず泣きたくなつた。

（宮筋の両親を持っている母親と、下級貴族の両親を持つ母親。それだけで、こんなにも違うの……？ 同じ父を持っているのに……。どうして、わたくしも柚麻瀬も……）

その時、カタン……という、小さな音がした。

（え……何……？）

百合が半身を起こすと、何やら人の気配がする。
そつと御帳台から這い出て、几帳の隙間から覗くと、確かに人が動いている様子が窺える。

百合は、全く警戒せずに几帳の隙間から滑り出た。
そして次の瞬間、呆気に取られてしまった。

全く見知らぬ人が しかも男が動いていて、唐櫃に頭を突っ込み、自分の着物を手に取っているのだ。
見るからに怪しい、盗賊である。

だが、呆気に取られたのは盗賊達も同じであつた。
互いに呆然と見詰め合つ姿を、外から差し込む月明かりが照らす。
その色は、いつもの黄色掛かった色と違い、僅かに紅みを帯びていた。

しばらくお互に硬直していたが、先に動いたのは百合の方だった。

男に顔を見られていて、しかも自分は单衣ひとえしか身に付けていないことに気付き、小さな叫び声を上げてその場にへたり込んでしまつたのだ。

百合はこの男達が盗賊だと氣付かず、ただ知らない男に顔を見られたと思い、必死に顔を隠そうとして檜扇を探した。
だが、それに盗賊達は安心したようだつた。

百合がへたり込んでいるうちに、单衣や小袖こそで、袴はかまや袴はかま、唐衣や裳からぎぬも

など、何枚もの百合の物である衣を奪い去つてゐる。

そのことによつやく氣付いた百合は、小さな叫び声を上げた。

「お前達つ……！ それは、私の物つ……！」

「うつせえな。『じちやごちや抜かすんぢやねえ！ おめえ、貴族の娘なんだろ？ だつたらこんななんいくらでも手に入るつづもんなんだよ！ ちつたあ融通してくれてもいいともんぢやねえかい？ え？ こん程度でてめえらの懐なんざちつとも痛まねえつづもんだからよ』」

訛り混じりの凄まじい勢いで言ひ返され、百合は言葉を返すことができなかつたが、実はその男の言つた意味の半分も分からなかつた。

ただただ、その男の勢いに呑まれていた。
だが、次の瞬間、目を極限まで見開いた。

「言つこと聞かねえと、殺すぞ。ん？ ちつとでも言葉を上げてみるや。すぐにしてめえの首が飛んでつちまうぞ？」

男はそう言い、刀をちらつかせ、百合の喉元に突き付けた。
百合は、それだけで動く氣力すら失せてしまつた。

そして、部屋を物色されるのをただ呆然と眺めているしかなかつた。

だが、ある物を掴んだ盗賊を見て、思わず悲鳴を上げてしまつた。
自分の顔が見られようと、喉が切り付けられようと、もう関係ない。

「……返しなさいっ！ どうか、それだけは……！」

それは、百合が九歳の時に死んだ母の形見の笛であつた。

それまで、百合と柚麻瀬は母の屋敷に暮らしていたのだが、母が死んだ時には既に祖父母も親戚もいなかつたので、父に引き取られ、この家の大君と中の君になつたのだつた。

「はつ！ こんなもんいくらでもあんだるうが。お貴族様なんだからよつ！」

盗賊はそう言つと、取り縋つてきた百合を蹴つた。

「 もやつ …… 」

百合はその場に倒れ伏してしまった。

「 おひ、てめえらー！ とつととずらかるぞつー 」

そう言つと、盗賊達は部屋から出て行つてしまつた。

その時、百合の覚悟は決まつた。

(何としても……お母様が遺してくれた笛だけは！)

百合は立ち上ると、笛を持っている男に飛びかかつた。

「 おわつ…………！」

男は思わず声を上げて、笛を取り落としてしまつた。

百合はすかさずそれを掴むと、大声を出した。

「 誰か来てえつ！ 賊よ、盗賊よーつ！ 誰か、誰かあつー！」

その大声に、盗賊達はぎょつとした。

「 ……てめえつ！」

百合の大声が効いたのか、それとも盗賊の気配に気付いたのか、辺りには少しづつ人の気配が集まつて来る。

盗賊達は、笛を諦めて逃げようとしたが、頭領と思しき刀を持つた男が、百合を凄まじい形相で睨んだ。

その凄まじさに、百合は思わず息を呑んだ。

「 もめえのせいで、その笛は諦めなきやなんねくなつた。その笛は結構高い値が付きそうだつたのによ。しかも、大声を出して人を呼ぶときた。こんまんまじや、俺の腹の虫が治まんねえ。てめえには、死んで貰うぜつ！ どうせおめえなんか、いてもいなくても同じこつたるうからなつ！ 貴族が一人死んだところで、俺ら庶民にや関係ねえからよつ！」

男は何とも身勝手な理屈を吐くと、刀を振り上げた。

(……お母様つ！ …… 柚麻瀬つ！)

百合が着ていた白い单衣は、斜めに切られた傷によつて紅く染まつた。

百合は、しっかりと笛を握り締めたまま、ゆっくりと倒れた。その濁つた瞳に、空で、紅く大きく輝く、満月が映り込んだ。

それを目にした途端、百合の濁つた瞳は軽く見開かれ
何が可笑しいのか、小さくくすくすと笑った。

少し樂しげに、少し嘲笑うかのよう。

そして、幼子のようにくすくすと小さく笑いながら、静かに事切
れた。

そして、

第三章「～平安ノ世、旧暦ノ水無月～」（後書き）

水無月…六月の異称。ここでは陰暦であるから、現在の七月頃に相当する。

……本当に、ルビが多くて申し訳ありません。今回はちょっと趣味に走ってしまったので、分かりにくい言葉が連発してしまいました。でも、あまりスペースもないのに、難しい言葉の解説をここに載せることはできません。「ごめんなさい」。

第四章 「～縄文ト弥生ノ狭間、旧暦ノ弥生～」

辺りはもう、日が暮れ掛かっていた。

母は夕日が照らす外を母は眺めると、溜息をついた。

「どうしたの？　お母さん」

「ねえ、コリ……モモ、やつぱり帰つて来ないのかしら？」

その言葉に、途端にコリの顔は曇つた。

「……ごめんね、コリ。今、この話はするべきじゃないよね……」

母がそう言つと、十七歳になつたばかりのコリは小さく首を横に振つた。

父や弟妹達も、硬い表情ではあるが、母を慰める言葉を口にした。コリは食事を終えると、母をしつかりと見詰めて言つた。

「お母さん。やつぱり、モモ連れ戻そつか？　いくら何でも……」

その言葉に母は狼狽えた様子を露わにしたが、小さく首を横に振つた。

「どうしてだよ？　母ちゃん。だって、モモ姉ちゃんだけじゃん。月神側に付いて隣村まで行つちやつたのつてさ。父ちゃんも、母ちゃんも、コリ姉ちゃんも、リヤ兄ちゃんも、僕も、妹のレイリも、弟のヘムサも、みんな太陽の女神様の側に付いたんだよ？　モモ姉ちゃんは異端なんだ。だから、そんなのどうでもいいじゃん」

コリの十一歳の弟のショムは、頬を膨らませて言つた。

余程、モモのことが許せないらしい。

今、この村と近隣の村では、一大紛争とでも言つべきことが起きている。

コリ達の祖父母達がまだ子供だった頃、海を渡つた向こうにある外つ国とくにから、大勢の人がらしい。

彼らは素晴らしい技術や知識を持つた人達で、たちまちこぢらの人の間にとけ込み、その知識や宗教、住む場所などを共有することになった。

彼らがもたらしてくれた物は皆素晴らしい物だったが、それでも別の問題を引き起こしていた。

この地で暮らす人々は、月の男神を至高神として崇め奉っているが、外つ国から来た人々は、太陽の女神を至高神として崇め奉っていたのだ。

そのせいで、月神を崇める者と太陽神を崇める者の、いわゆる月神派と太陽神派の一派に分かれてしまい、結局は一緒にやつていけなくなり、同じ家族といえども、別々の村で暮らすようになってしまったのだった。

それは、このユリ達の家も同じだ。

ただ、こついう状況はとても珍しい。

普通は、家族が別れるとしてももつと大人数で分かれるものだが、この家では、モモだけが月神に付き、他の家族全員が太陽神に付いたのだ。

そのせいでモモとユリ達は絶縁状態になってしまい、母以外の家族全員がモモのことに対して腹を立てていた。

しかし母は、やはり母親だからなのか、絶縁状態が一ヶ月続いた今でも、未だにモモのことを諦め切れていないらしい。
(だつたら、無理矢理にでもモモのことを連れ戻せばいいのに……
全く、お母さんつたら優柔不断なんだから……)

そうユリは思うのだが、そもそもいかないらしい。

というよりも、母はそうしたくないらしいのだ。

どこか矛盾していると思つても、仕方ないだろう。

「どうでも良くないわよ。モモは貴方のお姉さんなんだから……」

母は僅かに眉をひそめて言つたが、ユリはそれに猛反発した。

「そんなの、どうでもいいわよ。外つ国から来た信仰を認めずに古臭い月神なんかを崇め奉つててるような女は、もう私の妹でも何でもないわ。そうでしょ？ リヤ」

「ああ。俺もそう思うよ、ユリ姉さん。モモ姉さんは、月神に付いた時からもう俺らの家族でも何でもないからな。みんなもそう思う

だろ？』

リヤは、父、レイリ、ヘムサの顔を順繰りに見詰め、三人がそれに頷くのを、胸を張つて眺めた。

まだ十四歳の子供だが、やつて『い』とは一端の大人気取りだ。

父も、そんな様子を微笑ましく眺めている。

母も、そんな様子を眺めて僅かに微笑んでいるものの、その顔は僅かに蒼褪めて、モモのことをとても気に掛けているようだ。

ユリは、僅かに頬を膨らませた。

（全く、お母さんにいらない心配掛け。あんなの家族じゃないって言つても聞いてくれないし。モモは月神を信じてうちからいなくなつたけど、お母さんの心まで持つていけだなんて一言も言つてないわよ）

次の日の昼頃、ユリと十歳の妹のレイリは、村を出て森の中に入つて行つた。

もう大分暖かくなつて來たので、山菜などを採りに來たのだ。他にも焚き木を集めるという役割もあり、片手で扱える小さな鉈のような物と荒縄も持つている。

「ユリお姉ちゃん、ほらー！ ここにもあつたよ！ たらの芽つ！」

「うん。いい子ね、レイリ。でも、沢山は採らないでよ。理由は分かつてるでしょ？」

「うん！ えーっと、他の人とか動物が食べる為に残すんでしょう？」

それに、あんまり採つても食べ切れないからつ！」

『正解。でも、それじゃあちよつと足りないかな。もう一つ付け加えるとすると、私達が採り過ぎると、来年もこれが食べれないのよ。ちゃんと憶えておいてね？』

「はーい！」

レイリはそう返事をすると、せっせと山菜採りを続けた。

ユリはそれを微笑みながら見詰めると、焚き木を集めようとして

少し伸び上がって枝を落とし始めた。

すると、森の向こうの方に人影が見える。

コリは手を止め、向こうをじっと見詰めた。

(……どうして？ だって、うちの村から出てこの森に入ったら、いくら獲物を追っていても、あんな所まで行く訳ないのに……向こうから来るとしても、隣村は離れてて……)
そこで、コリははつとした。

(あ！ そうだ！ 隣村つて……月神派じゃないのよっ！)

そう思つと、もういても立つてもいられなかつた。

「ねえ、レイリ。ちょっとここで待つて貰つてもいい？」

コリは、緊張した声で言つた。

「どうして？ 何があるの？」

「うん。レイリにはちょっと危険だから、私が行つてくるわ。だからね、レイリ。しばらくここで大人しくしててね？ 絶対に怪我なんかしないよ！」

「うん、分かつた」

コリはそう言つと、採つた分の枝を手早く縛り上げ、一応の用心の為に鉈を持つてその人影の方に向かつて行つた。

「…………ねえ、やつぱり、ここまで来るのつて…………」

「何言つてんのよ。ここに来るつて言い出したの、メイラの方じやない。それに、知つてるでしょ？ 狩りでも何でも、滅多にこっちの方に人が来ないつて。でも、知る人ぞ知る山菜の穴場だつてことも」

その声を聞いた途端、コリは身体が少し震えるのが分かつた。

二ヶ月振りに聞く声だつた。

「ね、ほら、だれもいないつて……」

「モモつ！」

コリは、モモの言葉の途中で割り込み、姿を現した。

すると、その一人の少女はギョッとした顔で立ち竦んだ。

コリはその二人の顔を見て、先程の会話に納得した。

モモは半年程前に隣村に移つたが、その時、とても仲の良かつた、十六歳の同い年の幼馴染も一緒に隣村まで行つていた。

それが、このメイラである。

コリはすかさず「一人の近くまで近寄り逃げられないよう」にした。

「お姉ちゃん……」

モモは愕然とした表情で叫び、まつとじて慌てて身を翻そうとした。

だが、コリはそれを許さずに、ぱっとモモの腕を掴んだ。

「痛つ……ちょ、放しなさいってばつ……」

「いいえ、放さないわ」

コリの目は、徹底的に据わっている。

断固として放さないその構えを見て、モモは身体の力を抜いた。「何よ……あたしがいなくなつたのなんて、どうでもいいんでしょ？」あんたらは太陽神、あたしは月神。それでいいじゃないの！

モモの言葉に、コリはゆっくりと頷いた。

「ええ、私はそうよ。私だけじゃなくて、お父さんも、リヤも、シエムも、レイリも、ヘムサもそうよ」

「だつたら……」

「でも、残念ながらお母さんはそうじやない。あんたが出てつて一ヶ月以上になるのに、昨晚もモモが戻つて来ないかつてずっと気にしてたわ」

「……だからって、あたしにできる」となんて何もないでしょう？」

コリは、その言葉に眉を上げた。

「顔見せるぐらいはできるでしょ？ それでお母さんに絶縁を突き付ければ、いくらなんでも納得するでしょう。何にもできなくは

」

「それでも、あたしは絶対に嫌なの！ 太陽を崇める人が沢山いる所の空氣を吸つていたくないの！ お母さんには、お姉ちゃんか

「あ、あたしは……あたしには、もう無理なの…」

モモはそう言い放つと、ゴリの手を振り解いて走り去ってしまう。

ヨリは、どこか悔しそうにその後ろ姿を眺めていた。

母の瓶に、コリはほつとした。
顔を上げると、母だけではなく、父や弟妹達も心配そうにこちら

を見ている

ユリは、無理に笑顔を作つて言つた。

ても変だよ——」お姫ちゃんは、にこにこして来てから……

「大丈夫だつて。私は平氣よ？」
 ちょっと疲れちゃつただけだから

「……」

「うん、分かつてる」

ユリはそう答えると、何かを決心したような笑顔を顔に浮かべた。

その夜、みんなが寝静まつた頃に、ゴリゴリのそりと起き出した。

（ハ）……はへが、蟲（に）のれね

一には足音を忍はせて家を出た

が擦れるサワサワという音しかしない。

いた薪を掲げ、それと星明りを頼りに森の中に入つて行つた。

コリは思わず身震いをした。

あまりにも違ひ過ぎて、少し怖かつた。

だが、空には星や月が輝いている。

ユリは、隣村へと真っ直ぐに進み始めた。

「……ね。ここが……モモのいる村……」

ユリは、そう独り言を洩らすと、辺りを見渡した。

ユリは、子供の頃に二、三度、この村に来たことがある。

だから、真っ直ぐにモモの所に行こうとしていた。

ユリはモモがどこにいるのか、詳しくは知らない。

だが、大体の見当が付く。

モモはこちらに移つて来て、一月経つか経たないかといつところ

だ。

だから、恐らくこの村の知り合いの家に泊まつていると予測できる。

そして、この村に住んでいて、一番モモと仲が良かつたのは
(村長の息子だわ!)

そして、ユリは村長の家がどこにあるのか知つている。

これでも、ユリの家は村長の家だ。

だからこそ、隣村との交遊もあり、親しい人間もいると言える。

ユリはそつと村長の家に行くと、家中を覗き込んだ。

だが、驚きに大きく目を瞠ってしまった。

中には、誰もいなかつたのだ。

ユリは驚き、近くの家も全て覗き込んだ。

だが、年寄りも大人も子供も赤ん坊も……誰一人としていない。

ユリは、驚きのあまり立ち竦んでしまった。

だが、あることに気付いた。

(今日は満月だわ。あいつらが儀式を行つても、可笑しくはな

(い)

ユリはそう思つと家を出て、村の外れまで行つた。

すると、人々が輪になつて火を囲み、熱心に夜空の月に向かつて祈りを捧げているのが見えた。

皆頭を垂れて、月を崇めている。

ユリはこつそりとその様子を窺つていたが、ふと輪から立ち上がつた人影が目に入った。

炎が照らし出したその横顔を見て、ユリははっと息を呑んだ。

(モモっ……！)

モモはその輪から離れ、村とは逆方向に向かつて歩き出した。なのに、誰もそれを止めようとはしていない。

ユリは怪しく思い、気付かれないとモモの後を追つた。

モモは森の奥深くへと、灯りを持たずに、けれども迷いもせずにすんずんと進んで行く。

ユリは、最初は灯りを持つていたが、その灯りでモモに気付かれ兼ねないと気付き、行き当たつた小川の中に捨てた。そして、モモの後ろ姿を必死で追つた。

大分、時間が経つた頃だろうか。

モモの姿が急に消えた。

ユリは小走りになりモモが消えた辺りに行つたが、途端に納得した。

そこには、大きな洞窟が口を開けていたのだ。

中は暗いが、チラチラと炎が燃えているような気配がする。

ユリは意を決してその中へと入つて行つた。

(……深いわ。それに、暗い。いつまで続くの……？)

ユリは、灯りを捨ててしまつたことを少し後悔した。

それ程までに、この洞窟は深かつた。

だが、曲がり角に来た途端、人の声がして、ユリは思わず駆け出した。

すると、その角を真つ直ぐ進んだ先に、小さく組み立てられた祭

壇があり、そこでモモが跪いているのが見える。

そして、何とその目の前には、一人の青年がいた。

よく見ると、モモはその青年に向かって祈りを捧げているようだ。

だが、その青年の見た目はとても変である。

この辺りに住む人も外つ国の人も、ほとんどの人の髪の色は黒や焦げ茶や茶色で、瞳は茶色だ。

だがその青年は、まるで淡い月光の色をそのまま封じ込めたかのようない黄味の強い象牙色の髪を持ち、その瞳はまるで血を封じ込めたかのような紅だ。

見たこともないその色彩に、コリは思わず呆気に取られた。

だから、その青年がまっすぐこちらを見たこともすぐに気付かなかつた。

……気付けなかつた。

「……誰だ、お前は？」

その低い声で、コリははつと現実に戻つた。

そしてその声で、今までずっと跪いて一心に祈りを捧げていたモモは、驚く程鋭い顔と目付きでこちらをサッと振り返つた。

「お姉ちゃんつ？！」

モモは、信じられないというよつて目を見つめた。

「そうか……これは、お前の姉か」

その男はそう言つと、鋭く光る目でこちらを見詰めた。

「それで、お前はどうしてここにいる。この少女……モモは？」

男はそう言つと、先程の鋭い視線と比べると信じられない程に優しい目でモモを見た。

「とても熱心な信徒であり、優秀な少女だ。だが、その親族は皆アマテラスに付いたと言つ。アマテラスに味方する者が、何故この村に来る？」

(『アマテラス』って何？ 太陽の女神様の陣営の人達のことかな？)

「コリは意味の分からぬ言葉は無視することにして、クツと顎を

上げた。

「どうして私がここに来たのか、ですって？ そんなの決まってるじゃないの。その前にお訊ねしますけど、貴方、誰なんですか？」
名前は？ それに、モモとは一体どういう関係なんですか？」

その言葉に、男は僅かに顔をしかめたようだ。

「名を訊ねるならば、まず自らが名乗るべきだひつ」

「あら、それは失礼致しました。私はこのモモの姉にして、隣のサミレの村の村長の長女、ユリと申します」

「そうか。私は、ツクヨミと言つ」

「そう？ ではツクヨミさん、貴方はモモとはどういう関係ですか？」

「お前には関係ない」

その言葉に、思わずユリのこめかみに青筋が浮かんだ。

「関係ない、ですって？ よく言えたものね。……モモ、来なさい」

ユリはそう言つと、モモの所までスタスターと歩み寄つた。

「こんな人と一緒にいるなんて許さない。戻つて来なさい。ずっと私達の村にいなくてもいいから、とにかく、お母さんに顔を見せに来て。そうでないと、絶対に許さないわ。力尽くでも連れて帰るから」

ユリはそう言つと、モモの腕を強く引いた。

「いつ、た……ちょっと、放しなさい、つてばあ……！」

だが、ユリの力には勝てない。

しかし、そこにツクヨミが割り込んだ。

「待て。君はモモを連れて行くというのか？ アマテラスの所まで

？」

「いいでしょ、別に。貴方には関係ないわ」

「いいや、関係はある。モモを連れて行かれては、私が困るのだ」

「そう、よつ……！ あたしは、ツクヨミ、様つ……月の、神様の
つ……為に！」

その言葉を聞いた途端、ユリの頭の中で、何かが千切れた。

「 何が月の神よつ……何がツクミヨつー……みんなみんな、みんなんたを誑かしてつ！」

コリはそう言つと、モモが先程まで祈つていた祭壇に近付き、その上に乗つっていた供物やら何やらを、一緒にして薙ぎ払つた。

背後では、モモの鋭い悲鳴が聞こえた。

「 何て……何てことをつー……コリ、貴女自分のやつたこと分かつてるのつ？！」

「 勿論。月の神もツクミも貴女を誑かした疫病神よ。もう、ここにいることなんて絶対に許さない。一緒に帰るわよ」

だが、コリの言葉が終わるか終わらないかのうしろ、コリは背後の壁に叩き付けられた。

喉元が、苦しい程締め付けられる。

コリが薄つすらと目を開けると、ツクミの姿が目にに入った。

「 其方は我を侮辱した。……その代価、きつちりと払つてもらおつか」

その紅い目は鋭く、コリは本能的な恐怖を覚えた。

コリは、その洞窟から引き出された。

ツクミの背後に、モモが隨つてているのが見える。

(モモつ……あんたはつ……！)

声を出そうとしても、喉を締め付けられてるので声が出ない。

洞窟を抜け切ると、コリは、それなりの広さのある原に引き倒された。

コリは思わず咳き込み、薄つすらと涙を浮かべながらツクミとモモを見上げる。

「 コリよ。其方は、我を侮辱した。しかも、とんでもない勘違いを犯しているようだな」

ツクミは嘲るように囁くと、言つた。

「 お前達の言う月神は、この私のことだ。改めて名乗ることとしうか。私は太陽神天照の弟で、月神月夜見と言つ。それも知らずにこの私を侮辱するとは、愚かな娘だ。全く、これ程までに人の世に

は神の名が知られていないものなのか

月夜見

月夜見尊

はそう言つと、コリに向かつて腕を伸ばした。

「神を侮辱した罪

その生命一つで贖い切れると思つた」

コリは、あまりの恐怖に喘いだ。

「どうしようかな。どのようにして、罪を贖つて貰おうか」

「月夜見尊様。あたしに、よい考えがあります」

モモの声に月夜見尊は振り返った。

「何だ？」モモよ

「はい。夜空をじご覧下さこませ。今夜は、見事な紅い満月にござりこ
ます」

そう……今日の空には、月夜見の半身とも言える刃が　それも、
紅い満月が架かっていた。

「今、この場でコリをお殺しなさいませ。ですがそれだけでは、到底この罪を贖い切れません。ですから……」

モモは、酷薄な笑みを浮かべた。

「何回も転生させるのです。何度も、何度も。そして、今夜のように紅い満月が架かった夜に、コリは殺される……それを何回も繰り返せば、罪を贖つことも可能かと思います」

モモの言葉に、コリは鳥肌が立つのを感じた。

(何を……何を言つてるの？　仮にも実の姉を……殺すと？　そう
……言つうの？　貴女は？)

「そつか……それも、よい案だ」

月夜見尊は、ゆっくりとコリに歩み寄つて來た。

コリは腰が砕けて立てず、それでもこれには近寄りたくないとい
う一念から、へたばつたまま後退る。
だが、逃げ切れるものではない。

月夜見尊は、真上からコリを見下ろした。

「お前は、これからこの私を侮辱した罪を贖い続けるのだ。永遠に
……永久にな」

そして、コリの真上に手をかざした。

「嫌……嫌つ！」

ユリは、思わず悲鳴を上げた。

月夜見尊は、鋭く冷たい視線でユリを射抜く。

そして、どれだけの時間が経ったのか……月夜見尊は、かざして
いた手を下ろすと、モモを促してその場を立ち去つた。
ユリは、そつと安堵すると、立ち上がるうとした。
だが、立てなかつた。

ユリは、愕然として自らの身体を見下ろした。

だが、どんなに踏ん張つても、ピクリとも動かない。

そのうち、だんだん身体から力が抜けてくるのが感じられた。
激しい眩暈もしてくる。

そして、心臓がドクドクと脈打つ。

苦しい程、締め付けられているようで。

死んでも可笑しくない程の激痛が、ユリの身体を貫いた。

(嫌つ……つ、私、は、死に……たく、ないつ……！　私は……私、
はつ……！)

それがユリの、最期になつた。

そして……これから、『百合』としての、未来永劫続く贖罪の
始まりとして。

第四章「～縄文ト弥生ノ狭間、旧暦ノ弥生～」（後書き）

弥生…三月の異称。ここでは陰暦であるから、現在の四月頃に相当する。

今回、太陽神と月神として天照大御神と月夜見尊の名前が出て来ますが、日本神話に基づいた話ではありません。ただ、適當な名前が思い付かなかつたので借りただけなので、ご了承願います。

終章「～平成ノ世、新暦ノ臘月～」

「百々～！ そろそろ保育園行くわよ。すぐに来なさい～。
「は～い！ ママアつ！ でも、もひりょつとまつて！ おねえち
やんにあいさつしてからつ！」

百々は大声で階下に向かつて言つと、五年半程前 自分の産ま
れた日と同じ日に死んだ姉、弥風百合の位牌に向かつて、小さな手
を合わせた。

この時代の『モモ』にとって、自分の誕生日は、同時に『コリ』
の命日もある。

百々は熱心に祈つているように見えるが、それは上辺だけだ。
百々は、その年頃の幼子には全く似合わない、まるで大人のよう
な……それも、老獴な人間でなければ浮かべられないような表情を
浮かべ、嘲笑うようにクスッと小さな笑いをこぼした。

そして、小声で呟いた。

「全く、馬鹿みたい。月夜見尊様に逆らつて、その拳句、毎回毎回
天寿を全うせずに死んじやつて……神が『赦す』には、どんなに時
間が掛かるのか、全然知りもせずにねえ。ま、あたしは月夜見尊様
のお計らいで、毎回天寿を全うできるけどね」

そして、背の半ばまでに掛かる黒い髪を、鬱陶しげに搔き揚げた。
百々には、産まれた時から、前世の記憶がある。

平安時代の頃も、江戸時代の頃も、そして今も、百々は全ての記
憶を生まれ持つていた。

その上で、幼い無邪気な子供を『演じて』いたのだ。

その演技には、父も、母も、そして、一番憎い相手である『コリ』
も、綺麗に騙された。

そのあまりの単純さに、『モモ』は驚きを通り越して、哀れみの

ようなものを感じていた。

その愚かさと愚昧さに。

だが、感謝せねばならない。

『モモ』は、自然神を奉る宗教が衰退し、それどころか、神を信じない者が大多数存在するようになった現代でも、月夜見尊に対する想いを 信仰を、失わずにすんだのだから。

前世を憶えていない為、愚かな振る舞いを繰り返す者と同じにならなくてすんだから。

『モモ』はどの時代に生まれても、前世を憶えている為、いつも賢く立ち回ることができた。

だが平安時代の頃は、まだ自分も怒りを完璧に殺すことができなかつた。

それに、『百合』を蔑んでも構わないような むしろ、蔑むべき下地もあつた。

だから、その思いの赴くままにいじめていじめて、いびり抜いた。しかし江戸時代の頃には、自分の感情を制することができた。

姉の『百合』を慕い、無邪気な振りを『演じる』ことができた。だが、怒りが全くなかったかと言えば、それは嘘になる。

江戸時代の『百合』が殺された時には、あの縄文時代と弥生時代の狭間に生きた『ヨリ』が死んでから、もう一千年以上も経つていたというのに、『モモ』は『ヨリ』のことを赦すことは決してできなかつた。

そして、実は百々はあるの時、物陰からこいつそりと百合が殺される所を見ていたのだ。

江戸時代の『百合』が、『妹』の『百々』を護る為 逃がす為に野犬を棒で打ち、必死で追い払おうとし、それでも敵わなくて、押し倒され、血に塗れて死ぬ所を。

そして最期の、記憶を取り戻した証の驚愕の表情を。

それを見た途端、百々は深い満足感に包まれた。

それ程までに、充実した気分になつた。

実はその時、『百々』のすぐ近くまで、犬は来ていた。

だが、『モモ』は何も恐れなかつたし、その必要もなかつた。

何故なら、犬は狼との近似種であり、祖先が同一の動物である。

そして、その狼は、月の眷属。

おまけに、犬は狼よりも力の弱い生き物である。

月の神の加護を得ていた百々にとつて、犬などは恐れる動物ではなかつた。

怯える演技をしていただけで、内心、笑いを堪えるので必死だつた。

そして、月夜見尊を心の底から感謝した。

だが、その月夜見尊は一回『ユリ』と『モモ』だつた頃も含めれば二回だけでは、まだまだ飽き足らないらしい。

ついこの前、この時代の『百合』は、確かに殺されたのだから。一千五百年程も同じ魂を持ち続けている『モモ』は、いかにも楽しげに笑つた。

そして、『モモ』だつた頃のことを思い出した。

『すまないな、モモよ。其方には、少し厄介な仕事を頼みたい』

月夜見尊はユリを殺した後、真剣な表情になつてモモを見詰めた。

『何で「じぞ」いましょうか？　あたしは、月夜見尊様からのお願いでしたら、例え死ねということでも躊躇わずに実行致すつもりです』

モモの言葉に、月夜見尊は苦笑した。

『そつか……いや、そう難しい仕事ではない。其方には、「ユリ」の監視をお願いしたい』

『監視……で、じぞいますか？』

モモが少し呆気にとられて言つと、月夜見尊は頷いた。

『ああ、そうだ。これから、何度も何度も「ユリ」は生まれ変わるだろう。私は、そう簡単にあれを赦そとは思わぬからな。モモには、そのどの時にも、「ユリ」の妹としていて欲しい。勿論、ただでとは言わない。……やつてくれるか？』

『勿論です』

モモは、一瞬も躊躇わずに頷いた。

それ程までに、月夜見尊は、モモにとつて大切な神であつたから。

『そりが。……では、その礼として其方には、どの時に生きていっても必ず天寿を全うするように、私から加護を授けよ。そして、どの時に生きていても、それまでの世前世の記憶を持つたままに』

『充分です、月夜見尊様。あたしは、とても嬉しいです』

『そりが。……ありがとうございます。モモよ。感謝する』

月夜見尊はそう言って立ち去ろうとしたが、ふと、思い付いたようになに言った。

『そりが。……「コリ」が記憶を取り戻すのは、死の直前夜空に輝く私の分身を見てからにしようか。ふふ……今からでも楽しみだな』

月夜見尊はそう言つて、モモの元から立ち去つて行つたのだった。百々はその時のことを思い出すと、満足そうにニッコリと笑つた。「月夜見尊様。『コリ』は、いつの世も、最期の時には記憶を取り戻しておいででしたよ。平安時代の時も、江戸時代の時も、あたしはそれを覗くことができましたから、それは確実です。どうして平安時代のことも知つていていうことは、訊かないで下さいね？　だって、あの盜賊を手引きしたのは、あたしなんですから。物陰でこつそり覗いていてもいいじゃないですか。……月夜見尊様。あたしはとても嬉しいし、満足です。月夜見尊様のおかげで、天寿を全うすることもできますし。ただ、これには少し驚きましたね。あたしが、この時代に『産まれた』その日には、『弥風百合』は死んでしまったんですね。ちょっとぐらいは、樂しませてくれても良かつたんじやありません？　こうして頑張っているあたしへのお礼として。ねえ、月夜見尊様。次は、もつと樂しませて下さいね？』百々はそう言つて、床に手を付いて立ち上がつた。

「ふふ、ほんつとうに、馬鹿なコリね。あんなに月夜見尊様に歯向かつて、馬鹿な真似して一千年以上も赦されないような罪を犯して。ほんつと、呆れるわ。呆れ果てて言葉も出ないって、こういうことを指すのねえ」

百々はそう言つと、位牌の写真に向かつて、にっこりと微笑んだ。

「ねえ？お姉ちゃん？」

その笑みは、まるで悪魔のよつた、魔性の笑みだった。

まだ五歳の幼子には、全く似合わない笑みでもあった。

「百々～っ！早くしなさあ～いっ！もう行くわよお～ー！」

「は～いつ！わかってるう！」

百々は、『わざと元気良いく子供っぽく』返事をすると、部屋を

飛び出し、階段を駆け下りて行った。

仏壇の遺影の中では、一番最近の時代に産まれた九歳の『百合』であり、そして、この写真が撮られた時点で、既に二千五百年近くもの時を転生し生きてきた魂を持つた『ヨリ』という女性が、まるで何も知らないかのように、無邪気に、無垢なばかりの笑顔で微笑んでいた。

(終)

終章「～平成ノ世、新暦ノ臯月～」（後書き）

臯月…五月の異称。

『紅イ月』は、ここで完結となります。ここまで読んで頂き、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5899p/>

紅イ月

2011年2月23日12時55分発行